

徒然草

途上国の真の民主化にアマチュア無線家育成が喫緊の課題である理由

中野幸紀
関西学院大学教授

1. はじめに

(1) ブルキナファソでの経験

2010年3月から毎年1回ブルキナファソにアマチュアによる電波利用促進を目的とした現地調査に出かけている。5年間の時限プロジェクトとして大学内に特別研究センターも設置した。まずは相手国との大学間協力関係を構築し、現地大学生向けに電波利用演習講座を開講することが目標だ。内容は日本でやっているのと同じ、電波利用に関する知識とスキル、コンピュータネットワーク管理に関するスキル及び無線LAN管理に関するスキルを習得させること、これらの3分野についてそれぞれ10時間、合計30時間の授業を提供する。

しかし、今年2月の第4回現地調査で大きくつまづいた。

現地のアマチュア無線連盟会長 POODA 氏が、(イ) 現地のアマチュア無線家養成は連盟の専権事項だから現地大学における電波利用に関する知識とスキルに関する授業を実施することは慎重にと発言したこと。(ロ) コンピュータネットワーク管理のために必要な携帯型パソコンの現地大学への配布が現地大学間に不公平感をもたらすので配布先の選定を連盟にまかせることと発言したこと。

現地においては POODA 氏の連盟の協力がなければ電波利用はおろか、現地で我々がデモンストレーションとして実施している校内無線LAN構築実験も、全世界向けのアマチュア無線交信イベントも、いずれも難しくなる。しかし、特定団体又は個人の権益増大に貢献するのが我々の国際協力目的ではない。困ったことだ。

(2) 現地の状況

ブルキナファソのアマチュア無線家の数は不明である。現地から出る電波のほとんどすべてが我々のように海外からブルキナファソを訪れ、アマチュア無線局を運用する外国人ビジターたちである。このような状況から推察すると、たぶん、IARUの規則にあるIARU支部(現地連盟)の設立に必要な現地会員数15名の確保もおぼつかないのではと思われる。つまり、現地の人たちはアマチュア無線をやっていない。

なんとかできるだけ多くの現地の人たちにアマチュア無線資格(国際無線規則に則って、無線利用に関する一定の知識とスキルを現地政府が試験を行って認定する。)を取得して

もらうことが目標なのだが、現状は国家試験制度さえ整えられておらず、大学生レベルでの資格取得者はゼロである。

(3) 途上国でのアマチュア無線普及の必要性

では、なぜ、個人（アマチュア）の電波利用促進が途上国の発展に必要なのか。

ITU の 2003 年勧告では、電子通信・無線などの科学知識へのアクセス機会を途上国に増やすこと、災害時の通信手段を確保することの 2 点で、先進国は途上国のアマチュア無線活動を支援すべきだと述べている。

しかし、それだけではない、途上国のアマチュア無線家育成を支援するのは、社会における「アマチュア」の存在が経済発展だけでなく、社会の民主化にとって非常に重要だからなのだ。これについて以下述べてみたい。

2. 本論

(1) セマホア (Sémaphore)

フランス革命政府軍が初めて亡命王党派・周辺帝国混合軍との戦いに勝利した 1792 年 9 月の Valmy の戦いに先立つ 1792 年 3 月 22 日、Chappe 氏が国民法廷においてその建設を提案し、2 年後の 1794 年 7 月からパリと国境各地を結ぶこととなった高速空中通信システム、セマホア (Sémaphore¹、Chappe 式腕木通信システム) は、1794 年にフランス革命軍のベルギー国境での勝利を数十分のうちにパリに報せ、革命政府の信頼を勝ち取った。以降、ナポレオン帝政時代にミラノ、プロシアにまでその通信網を拡大した。

このセマホアは、当時としては最先端技術だったと同時に地球上最大規模の軍事・行政通信システムだった。発明者 Chappe の意図に反して、個人がこの技術を使うことは禁止され、軍と政府がその利用を長く独占した。

しかし、現代では、このセマホア通信は、旗流信号²、手旗信号、鉄道腕木信号機などとして受け継がれて、個人または小さな組織間の通信手段となっている³。

(2) セマホアとアマチュア無線

19 世紀には個人利用が禁止された技術が、現代では、大きな社会システムを必要としない個人間又は短距離拠点間通信手段として、いつでも、だれでも、どこでも、自分の持つ

¹Télégraphe システムのひとつ。1812 年 Boiste 仏語辞書に初出 (CNRTL, 2013/7/15 アクセス)。現代ではそのうちのひとつの信号操作である手旗信号を指すことが多い。

²ジブリの映画「コクリコ坂から」によって映像化され、若い人たちの間に強い関心を惹き起こすこととなった艦船・港湾局間通信の旗流信号もセマホア通信の広い意味での一部と考えられる。

³Catherine Bertho, télégraphes & téléphones - de Valmy au microprocesseur, 1981, Le Livre de Poche、

ている知識と技量で利用可能となっている。それらの技術が、セマホアであり、モールスコードによる無線電信⁴である。

途上国に技術移転するとすれば、巨大システムとしての Chappe 式が良いか、手旗信号方式が良いか。1840 年以降、植民地管理のためにフランスは前者を選び、モロッコとアルジェリアに大規模なセマホア通信網を建設し、技術移転を図った。フランス陸海軍は手旗信号と無線電信の知識と技能を植民地の人々には必ずしも積極的に普及させなかった。個人のエンパワメントを恐れたのだと 1930 年代のフランスのアマチュア無線家が指摘している。

このセマホアと、無線電信は、初期投資が非常に小額ですみ、個人で管理・運用でき、中継ケーブルなどの社会インフラを必要としない点が共通である。手旗信号、旗流信号では自分で旗を作ればいいし、モールスコードを使う送受信機は FM ラジオといくつかの電子部品を組み合わせれば組み立てることができる。そもそもブルキナファソにおいても FM ラジオの普及率はとくに 100%を超えている。足りないのは知識と技能である。

(3) 伝共システム (いわゆるコミュニケーション)

Mattelart⁵によれば、社会学的な意味での communication、すなわち「伝共⁶」とは、文字の使用、言語統一・標準化から始まり、貨物（文書、手紙を含む）と人の往来による客観状報と意思情報の伝送⁷、芸術・文化の共通価値（常識）の創造、道路、港湾、伝送路などのインフラ構築などのすべての人々の活動を包含した「権力関係」ということになる。中央政府はこれを独占し、民衆を意のままに動かそうとする。伝共という言葉は、やじ馬が火事見物しながらその共通体験を基盤に世論を形成する、そういった社会的状況を表すのにはテキトーな言葉である。日本語訳として使われる通信という言葉にはそこまでの概念の広がりがない。

つまり、生活体験、文化などを共有する社会的行為、権力関係まで含めた communication が「伝共」ということになる。

⁴モールスコードによる無線電信は 2013 年現在アマチュア無線界だけにおいて存続している。

⁵ Armand Mattelart, *L'invention de la communication*, La Découvert/Poche, 1994, 2011

⁶日本語では communication の訳語に充てる適当な言葉がなく、カタカナのコミュニケーションなどという言葉が使われることが多い。そこで、ここでは Mattelart の言う社会学的な communication の訳語として「意思の相互伝送と共通認識の形成」、縮めて「伝共」と書くことにする。

⁷森鷗外はドイツ陸軍操典を日本語に訳するとき、客観的状勢を伝えるのに状報、主観的報告を伝えるのに情報と呼んで区別した（小野厚夫、*IP SJ Magazine* Vo.46 No.5 May 2005, p.479）。

途上国では、植民地政策によって村落ごとに生活圏が設定され、伝共範囲は限られていた。個人レベルの村落境界を超えた伝共は許されなかった。現在のケータイの普及がこうした閉鎖村落の社会秩序を大きく変更しようとしている⁸。

(4) ジャスマン革命と職人としてのアマチュアの出現

2011年にチュニジアで起こったジャスマン革命は、政府によって独占されていた従来からの古いタイプの伝共メディアの傍らに新たな伝共メディアが出現し、人々が勝手につながった結果だと考えられる。

ラジオ・テレビ放送だけがマスメディアだと考えていた中央政府の理解を超えて、ケータイ（SMS）メッセージと Twitter メッセージが回覧され、リツイートされた。回覧されるメッセージ数が「臨界点」を超えたとき、伝共の特性としてマス（中央統制）からパーソナル（市民分散）への権力関係の移動が生じた。

Twitter メッセージをリツイートした人々は職業的革命家ではなく、SMS の扱いに手慣れたケータイ愛好家（amateurs de SMS）だったのだ。

しかし、これだけでは必ずしも民主的な社会構築の原動力とはなりえない。単なる「通」または「目利き」としての愛好家の存在だけでは次の時代の建設はできないのだ。

教育の平等と同時に、知識・技能獲得の個人的経験の蓄積が他人への寛容を生み出し、次の時代建設の原動力となる。

SMS 愛好家がケータイを分解し、その部品を組み合わせ、あるいは、新しいソフトをインストールすることでまったく別の無線機器を作り出す。こういう手を動かすブリコラージュ的経験を積み重ねることで、FLICHY (2010)⁹ の言う、新しい職人としてのアマチュアが生まれる。プロと素人の中間的存在としてのアマチュア¹⁰ではなく、新しい民主化推進層としての「アマチュア」が時代を作るのだ。彼らは正統な大学教育を受け、博士号を有するアマチュアなのだ。

(5) ハイドパークのスピーカーズコーナーと Z 旗

伝共は状報・情報の受信者を必要としているのかと言えば、そうではない。人々が太古からおこなってきた伝共は、人がホモサピエンスとなる以前から「ひとりごと（モノローグ）」でしかなかった。受信者などあろうとなかろうと発信するという特性が生物を進化させてきたのだ。単細胞生物が環境激変によって自己組織化し、おらは死んじまっただあ

⁸ 羽瀧一代、内藤直樹、岩佐光弘編著、メディアのフィールドワーク ―アフリカとケータイの未来、北樹出版、2012

⁹ Patrice FLICHY, le service de l'amateur, La démocratisation des compétences, 2010

¹⁰ Charles Leadbeater & Paul Miller, Pro-Am Revolution, Demos, 2004

というメッセージを残すことによって種の保存に貢献する。つきつめれば、伝共の社会的役割は次の世代への遺言モノログに他ならない。99.999%のモノログはこうして受け取る人なく消えていく。Twitterの世界もブログの世界もそうだ。もちろん、歴史的にはアマチュア無線が最初である。

さらに遡れば、モノログ発信の原点が、ハイドパークのスピーカーズコーナーで演説する人であり、トラファルガーの戦いで旗艦にZ旗を掲げたネルソン提督¹¹であることに思い至る。

演説も、セマホア的一种としてのZ旗も、その後の無線電信も、誰も見たり聞いたりしていなければそれまでという共通の性質をもつ。会話、対面通信ではなく、現代の「放送」などに近い、垂れ流しという意味でモノログである。しかし、Z旗はそのメッセージを伝えるための効率的な組織（軍事組織）の存在を前提に掲げられた点で個人モノログと異なる。

モノログメッセージを特定の人に効率的に伝えることができるのが組織的な伝共構造の存在である。ジャスマン革命では中央から市民に伝共権力が移動した。こうした伝共権力関係をめぐる議論は、組織的権力と個人の自由意思によるメッセージ発信の自己組織化の問題を扱う。個人の自由意思による発信機会の増大が民主主義と深くかかわってくるからだ。

（6）ユートピア論を超えるには

Louis-Joseph LIBOIS(1977) が指摘したとおり、人々がケーブルでつながれ、生活が標準化され、監視・抑圧された Orwell 的な情報管理社会¹²が出現するのか、convivial な道具としての伝共環境を手にした自由な知識社会が Illich の描いたひとつのユートピア¹³として出現するのか。

Orwell の描いた情報管理社会は個人レベルの伝共努力の放棄が前提に存在する。国家、企業などの提供する組織化された伝共システムだけに頼り、その利用を通じて生活まで管理される社会である。19世紀型植民地社会を彷彿とさせる。

組織の提供する伝共システムに代わる個人個人の管理する伝共システムを自ら作りあげる知識と技能が植民地に備わっていれば、Illich の描いたユートピアに近づくことができたかも知れない。

¹¹ 日露戦争の日本海海戦において東郷提督がZ旗を掲げさせたのはこの故事によるとされている。

¹² Orwell(1964)

¹³ Illich(1973)

この個人レベルでの伝共能力のエンパワメントが国際無線規則¹⁴で認められているアマチュア業務の存在意義なのだ。

3. まとめ

(1) 過渡期の終焉

人類は、19世紀に国家を支える軍事システムとしてセマホア通信網を構築して以来、常に相手を意識した「相互通信」を地政学的要請から発達させてきた。しかし、21世紀の今日においては、そろそろ、伝共システム発達系譜におけるこうした「過渡期」は終わろうとしているのではないか。

新たな方向は、個人間の自由なモノログのやり取りに向かう。Twitterであり、LINEであり、SNSかも知れない。しかし、それらの最初の社会的原型であり、現在でも民主主義社会におけるもっとも有効な個人発信手段として認められているアマチュア無線を再評価し、一刻も早く途上国に届けなければならないのではないか。

(2) 地平線上の伝共

ジャスマン革命を実現したアフリカの国々がユートピアとしての真の民主主義構築に王手をかけることになるのか、他山の石として眺めながら、まずは西アフリカにおけるアマチュア無線の普及が大学間国際協力の枠組みの中で実現可能かという難題になんらかの回答を出さなければならない。より多くの国際協力・開発専門家のコメント、アドバイスを待つ。

アマチュア無線のデモンストレーションをブルキナファソの大学で行ってみると、日本の若者よりいきいきと、目をきらきら輝かせながら数多くの現地の学生たちが見に来てくれる。これを見れば、21世紀は彼らの時代になるのかも知れないと思う。アマチュア無線家の育成が、民主社会の構築につながることをめざして。しかし、前途は厳しい。

¹⁴ この無線規則は、米国のアマチュア無線家であり、大富豪だった Maxime 氏が 1928 年のワシントン国際電信会議で強力に主張し、その後 1932 年に国際規則となった。米国のリベラルな考え方が反映されている。